

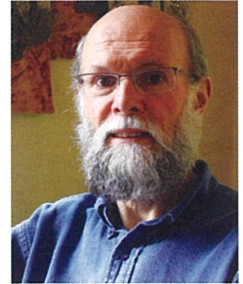
監視、識別、そして人権

—個人情報 ID システムと社会正義をめぐる問い—

◆日時 2012年4月20日（金）
15時10分～16時40分

◆場所 関西学院大学 法学部チャペル
(法学部本館1階)

◆講師 ディヴィット・ライアン氏
(クィーンズ大学社会学部教授、
同大監視スタディーズ・センターディレクター)



入場無料・申込不要・通訳あり *本講演会ではパソコンテイクによる情報保障を予定しています。

講演概要

監視活動の広がりが現在、人権に重大な影響を与えている。とりわけ、セキュリティの確保が監視強化の理由となっている今日の状況では、社会的に弱い立場におかれている人々の人権に深刻な影響が出ているようだ。そうした事態は、空港や職場で個人を識別する監視活動のなかに顕著に見てとれる。

だがそもそも、監視が人権におよぼす影響の本質とはなんだろうか。どうしてその影響力は、セキュリティが監視の根拠となったときに高まるのだろうか。どのような過程を通して、監視の人権への影響が、識別の問題として現れるのだろうか。

これらの問いに安易な答えは出せないが、歴史的、社会学的分析から得られるものは多い。第一に、監視と人権は相反する関係にあると私は考えるが、監視が増大すれば人権が縮小するというような、単純なゼロサム関係ではとらえられない。第二に、セキュリティが監視強化の根拠であっても、今日的なセキュリティの追求はテロリズムによって引き起こされたわけではない。9・11 やそれに関連したテロ攻撃に対して監視強化という対策がとられたことは、この点をおさえて理解したい。第三に、個人を識別する実際の活動に目を向ける必要がある。識別過程を検証することで、今日的な監視がいかにテクノロジーに依存しているかが明らかとなり、アイデンティティをめぐる倫理とポリティクスを人権問題として問い直す必要性に気づくだろう。

講師紹介

カナダ・クィーンズ大学社会学部教授、同大監視スタディーズ・センターのディレクター。カナダ社会科学人文研究評議会から助成金を得て、国際共同プロジェクト New Transparency: Surveillance and Social Sorting を主催。

長年にわたり監視スタディーズの国際的第一人者として活躍し続けている。監視を通じた「Social Sorting= 社会的振り分け」に早くから注目し、社会科学的な観点から監視が引き起こす諸問題を問い続けてきた。近年はIDカードと識別が市民権に与える影響についての研究に取り組んでいる。技術・制度面の分析のみならず、倫理的な観点を踏まえた監視研究者として名高い。

最新の邦訳書は『監視スタディーズ』（岩波書店）。その他『監視社会』（青土社）、『9・11 以後の監視』（明石書店）、『膨張する監視社会』（青土社）などが日本語に翻訳されている。

関西学院大学人権教育研究室

Institute for Human Right Research and Education

Tel : 0798-54-6720

E-mail : human-right@kwansei.ac.jp

http://www.kwansei.ac.jp/r_human/index.jsp

「戦争と原発」

～アフガン、シリア、福島を取材して～

◆ 2012年6月26日(火)

● 午前9時00分～午前10時30分

場所／西宮上ヶ原キャンパス
B号館303号教室

● 午後1時30分～午後3時00分

場所／神戸三田キャンパス
II号館102号教室

◆ 講師／西^{にし}谷^{たに}文^{ふみ}和^{かず}氏

(イラクの子どもを救う会代表・フリージャーナリスト)

*本講演会では手話通訳/パソコンテイクによる情報保障を予定しています。
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご利用下さい。

■講演内容

私は04年末にフリーランスとなってから、主にアフガニスタンとイラクで戦争被害者の現実を取材してきた。アフガニスタンでは30年以上にわたる戦争の結果、多くの避難民が家を奪われ、極貧生活を送っている。カブールの子ども病院には、劣化ウラン弾の影響と思われるがんの子どもが多数入院しており、地雷やクラスター爆弾の不発弾処理問題と合わせて、戦争とは、それが終結した後も被害を生むものであるという実態を、映像を通じて解説する。

また、避難民キャンプや子ども病院には、国際援助はほとんど入っておらず、日本からの支援金50億ドルがどこへ消えているのか、日本は何をするべきなのか、について解き明かしたい。

その後、今年取材したシリア難民の状況を最新映像で報告し、今後のシリアについての私なりの予想を述べたい。

さらに映像とパワーポイントを使って、「戦争はなぜ起こるのか?」をテーマに解説し、同じ構造で原発安全神話が造られてきたこと、主にメディアの役割、リテラシーについて私見を述べる。

最後に、日本は国際社会で何をするべきなのか、私たちが、こうした紛争にどう関わっていけばよいのか、展望を述べて講演をまとめた。

■講師紹介

立命館大学を中退し、大阪市立大学を卒業。1985年から吹田市役所に勤務。04年末に退職し、現在はフリーランスジャーナリストで「イラクの子どもを救う会」代表。

9・11事件後に始まった「テロとの戦い」以降、イラクとアフガンを精力的に取材。大量に使用された劣化ウラン弾の影響と思われる被害の実体を見て、内部被曝の恐ろしさを痛感。被爆国である日本から人道支援を行う必要があると感じたため、03年12月、イラクの子どもを救う会を設立。

「中東革命」の勃発に伴い、11年にリビアとバーレーン、12年にはシリアを取材し、「アラブの春」の実像に迫った。

06年度「平和協同ジャーナリスト基金賞」を受賞。
テレビ朝日「報道ステーション」や読売放送「ニュースten」、MBSテレビ「VOICE」など出演多数。著書に「報道されなかったイラク戦争」「オバマの戦争」(せせらぎ出版)などがある。



関西学院大学主催
秋季人権問題講演会

「平和への権利」の 文明史的意義

：「人間の不安全」マイノリティ中心の「世直し」

◆ 2012年11月20日(火)

- 午前9時00分～午前10時30分
場所／西宮上ヶ原キャンパス
B号館301号教室

◆ 2012年11月21日(水)

- 午前11時10分～午後0時40分
場所／西宮聖和キャンパス
6号館613教室

◆ 講師／武者小路 公 秀 氏

大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター特任教授
国際NGO IMADR(反差別国際運動)副理事長
ピース大阪会長 ヒューライツ大阪会長
日本人間安全保障学会会長

*本講演会では手話通訳による情報保障を予定しています。
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。

■講演内容

1. 人民中心のグローバルな正義への問題提起としての「平和への権利」
「平和への権利」は規範に関するグローバル革命のなかに位置づけられる。
2. 「人権」概念の発展の新段階としての「平和への権利」
「平和への権利」は、人権の第四世代として、「人権」概念の発展史の中に位置づけられる。
3. 現代の国際人権レジームにおける植民地主義と「平和への権利」
「人道的介入」という米欧人権先進国の「人権」攻勢への非西欧世界からの回答。
4. 「平和への人権」に集約される内発的「人権」の主張
「外発的」人権としての国家・市民契約モデルを超えた「アイデンティティ」コミュニティの平和に生存する権利主張。
5. 西欧中心普遍主義を超越する、多文化主義的なグローバル正義をめざして
「平和への権利」が主張する「人間の不安全」マイノリティ中心の「世直し」。

■講師紹介

現職：大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター特任教授、国際NGO IMADR(反差別国際運動)副理事長、ピース大阪会長、ヒューライツ大阪会長、日本人間安全保障学会会長。

略歴：1929年、ブリュッセル生まれ。学習院大学法学部卒業。学習院大学、上智大学、明治学院大学、フェリス女学院大学、中部大学教授歴任。ほか、国連大学プログラム担当副学長。

業績：Global Issues and Interparadigmatic Dialogue:Essays on Multipolar Politics. Albert Meynier, 1988, 「人間安全保障論序説：グローバル・ファシズムに抗して」(国際書院、2003年)その他。

総合テーマ：
Culture of Human Rights
一人権文化を育む
(2010～2014年度)



私たちの未来、 社会の未来

◆ 2012年12月20日(木)

● 午後1時30分～午後3時00分

場所／神戸三田キャンパス
Ⅱ号館201号教室

● 午後4時50分～午後6時20分

場所／西宮上ヶ原キャンパス
B号館103号教室

◆ 講師／湯^ゆ 浅^{あさ} 誠^{まこと} 氏

(反貧困ネットワーク事務局長
NPO法人自立生活サポートセンターもやい理事)

*本講演会では手話通訳パソコンテイクによる情報保障を予定しています。
また、録音、録画を行い図書館資料として保存しますのでご活用下さい。

■講演内容

人口減少、少子高齢化、格差・貧困の拡大など、日本はいま難題に取り囲まれています。どうしたら「誰かに任せる」のではなく、自分たちの力でそれを改善していけるのか、社会の問題、自分の問題として考えてみたいと思います。

■講師紹介

反貧困ネットワーク事務局長、NPO法人自立生活サポートセンターもやい理事。90年代より野宿者(ホームレス)支援に携わる。2008～09年年末年始の「年越し派遣村」では村長を務める。2009年から通算2年間、内閣府参与。東京大学大学院法学政治学研究所博士課程単位取得退学。1969年生。著書に『反貧困』(岩波新書、2008年、第14回平和・協同ジャーナリスト基金賞大賞、第8回大仏次郎論壇賞)、『どんとこい! 貧困』(イーストプレス「よりみちパン!セ」シリーズ、2009年6月刊)、最新刊に『ヒーローを待っていても世界は変わらない』(朝日新聞出版、2012年)。2012年中は大阪でも活動を行う(団体名AIBO)。

総合テーマ：

Culture of Human Rights
一人権文化を育む
(2010～2014年度)

